



TITLE:

カントン學海堂の知識人とアヘン 弛禁論、嚴禁論

AUTHOR(S):

村尾, 進

CITATION:

村尾, 進. カントン學海堂の知識人とアヘン弛禁論、嚴禁論. 東洋史研究
1985, 44(3): 489-522

ISSUE DATE:

1985-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154127>

RIGHT:

カントン學海堂の知識人とアヘン弛禁論、嚴禁論

村 尾 進

はじめに

一 學海堂の人々

二 カントンとアヘン論議

a 吳蘭修と「弭害」

b 溫訓と「弭害續議」

おわりに

は じ め に

陳澧に「海國圖志の後に書し張南山先生に呈す」と名づけられた一篇がある。⁽¹⁾魏源の『海國圖志』を最も早い時期に同時代人が評したものである。時代人として記憶されることになる作品である。勞作に對するねぎらいのことばから始まり、議攻篇から議守篇へ陳澧の吟味は進む。議款篇に至り林則徐とアヘン問題に觸れるに及んで陳澧の感情は昂りを抑えることができないように見える。もし林則徐がアヘンの強制繳出を命令しさえしなければ、もし保證書の提出を強制しなければ、もし關天培に命令して夷商の船を撃つて敗れ、敗北を諱みて勝利と偽り外夷に輕んじられることさえなければ……。魏源は激變（アヘン戰爭の勃發）はアヘンの強制繳出のためではないという。その後半年の間イギリス側に動きがなかったから。だ

が、それは軍隊が到着するのを待っていただけのことだ。カントン人は皆それを知っていた。傳聞は待むに足りない。兵は凶器であり戦いは危事である。輕々しく論じてはならない――。

『海國圖志』は夙にカントンで關心を集めていた。陳澧は『東塾讀書記』の作者であり、清末廣州學海堂の、つまりカントンの學風を傳える學者である。張南山とは陳澧の師、やはり學海堂の學長を勤めた張維屏（詩「三元里」の作者）を指している。張維屏は北京で龔自珍・魏源とも交際を持っていた。張維屏の眼に二人は人の考えを聞き入れない傲慢な人間に映った。⁽²⁾

清末思想史を龔自珍・魏源から説き起こすことはすでに定型となっており、「龔魏」と並び稱された同時代における名聲、あるいは後の時代に残した影響の大きさを考え合わせればそれは充分理由のあることである。例えば宣南詩社というようなまとまりのよい場にそのすべてを収めることはできないとしても、彼らの周圍に林則徐・黃爵滋・包世臣・張際亮らを配し、時代に對して同じ傾きを持った一群の人々とみなすことにそれほどのためらいはない。⁽³⁾ その中、あるものは公羊學者であり、幾人かは經世官僚・經世家として鹽政・漕運・アヘン問題などの時代の課題に實際に攜わりあるいは發言した。林則徐と魏源は『四洲志』『海國圖志』の編纂によって西洋事情に早く關心を示し西洋の長所に學ぶことを主張した先驅者として高く評價される。だが、彼らを時代の好ましい典型に押し上げ質の高い研究が蓄積されるにしたがい、その思想は私たちの眼となり、やがて同世代の他の人々とその考え方に對する眼差しは鈍り無神經なものになっていく。思想の影響の大きさはそれが生まれてくる場の切實さに必ずしも釣り合わない。

乾嘉の學が翳りを見せ龔自珍・魏源が今文學に手掛りを求めようとしている頃、阮元によってカントンにようやく漢學がもたらされる。廣州學海堂の知識人たちはカントンにおける阮元の後繼者である。北京における出身を異にする文人たちの絶え間ない交流とは對蹠的に、學海堂の知識人たちは文化的に孤立しおのずからまとまった集まりをなしていた。彼らは廣州城内に住み、特別な機會を除いて廣東を離れることはなかった。その文集を繰るとき彼らが共通の社會的經驗

を分かちあっていることが實感でき、互いの交際の様子を重ねていけばやがて目のつんだ網のようなものができあがる。草創期の學海堂の知識人と龔自珍・魏源らとはほぼ同じ世代に屬する。一八三〇年代、アヘンをめぐる論議は對照的な彼らを共通の問題に結びつけた。アヘンに對する禁令を緩め合法化しようとする許乃濟の試みは、數年溯ればある學海堂人士の構想を踏襲したものだ。吸烟者に極刑を求めることでアヘンを嚴禁しようとした黃爵滋らと學海堂人士が對照的に論じられる理由はここにある。⁽⁴⁾人に及ぼすアヘンの害への配慮が弛禁論には缺けている。アヘン貿易の侵略的性格に對する危機意識にも乏しい——。學海堂の知識人にとってこれは不名譽な事實であるように見える。だが、黃爵滋・魏源らからの視線をカントンからの眼に移し注意深く學海堂の人々の文章を読めば、弛禁論の萌していたカントンが置かれていた情況の中の彼らの感じ方をいくらか読みとれるし、許乃濟の上奏だけでなく黃爵滋の上奏も學海堂の周邊の知識人の原稿に據ったと書かれてあるのに氣づく。

彼らはカントンの知識人であった。農少なく商多しと稱され唯一の開港地であったカントンで行商は彼らの都市の一部をなしていた。他の人々には均しく因循としか映らなかつた阮元もカントンの商民を思いやる總督として彼らに慕われた。根本的にアヘンを禁止するためにカントン貿易そのものを斷絶せよとする主張を念頭において、ある廣東官僚はカントンの士人に問いかけている。⁽⁵⁾西洋の諸蕃はカントンにとっては大利であるが、中國にとっては大害である。ひそかに紋銀を買いアヘンを持ち込み中國の財源を損つてゐる。また強情で容易に制しがたい。これを控馭しアヘンの流入を禁絶する手だてはあるのだろうか。これはカントンの士大夫の思いでもある。アヘンをめぐる問題はまず眼前の貿易を維持しなければならぬカントン自身の問題であり、つきつめればそれは中國全體の利益と背馳するものであるとカントンの人々は意識していた。彼らは一八三〇年代前半のカントンが置かれた情況の中から北京の動きそして他の人々の發言に神經を尖らせていた。龔自珍・魏源らの名聲は彼らを魅きつけたが、カントンに對する無理解は彼らを傷つけ苛立たせた。⁽⁶⁾

一 學海堂の人々

後からふり返ってみれば、阮元によって學海堂が設けられる以前、カントンに文化らしい文化はなかったように感じられた。⁽⁷⁾詩人は多い。それを除けば書院で科舉受験のための學問が講じられているにすぎず、⁽⁸⁾「語孟學庸」を越えることはなかった。乾隆四十五年冬、惠士奇が督學として入粵するに及び、はじめて五經すべてを讀むことを教えられた。それまでは科舉受験のための參考書しか流布していなかった。

道光元年春、浙江詒經精舍の例にならって阮元は學海堂課試を開始する。廣東全省の舉人・貢生・生員・監生を對象とし、困學紀聞・日知錄・十駕齋養新錄の跋を課すことから始まった。⁽⁹⁾「學海」とは後漢の時代、學識淵博をもって鄭玄と並び稱された何休にちなむ。課試には阮元自らがテーマを與えた。廣東の士人たちは意識していなかったかもしれないが、ある人々には明の陳白沙・湛甘泉の餘波が根強く残っているように阮元には感じられた。學業のための訓練からより多様な學問へ、理學から實學へと廣東の人々を導くのが阮元の目的だった。科舉受験準備のための課試はすべて廢され、經解が中心となったが一題に限らず廣く史學・詩賦・古文辭に及び、各々長ずる所、性に近き所を選ばせた。

同時に阮元は學海堂の堂宇の建設地を搜しはじめた。明の南園の舊趾はやや湫隘に思われ、西關の文瀾書院は風景に乏しい。河南の海幢寺も候補にあがったが久しく迷った末、廣州城の北、粵秀山の山腹に建造することに決められた。道光四年秋、簡素を宗として築堂が開始され冬には完成した。この年、課試の答案を編集した『學海堂初集』十六卷が刊行される。

道光六年夏、雲貴總督に轉ずることになった阮元は、カントンを去るにあたり文檄すなわち「學海堂章程」を發し、八人の學長を選び複數學長制をとることを宣言した。課試の方法・肄業生の膏火・經費の詳細もこの章程の中に規定された。學海堂は阮元の手を離れ、秋には新しい學長たちが課試をとりしきった。阮元の後を繼いで兩廣總督となった李鴻賓と學

海堂との間の親密な關係を示す記事は乏しい。道光十二年秋、盧坤が着任し學海堂の學長たちとの交流は回復する。十四年カントンに來游した錢儀吉を通して阮元の意向が伝えられ專課肄業生十名が設けられた。その中に陳澧、朱次琦の名が並んで見える。道光十八年には『學海堂二集』、十九年には『學海堂志』が刊行される。

學海堂の歴史はカントンにおける漢學の浸透を語っている。學海堂以後、菊坡精舍、五公精舍など形式を同じくした書院が相繼いで興る。科學受験の準備を標榜した舊來の書院も多く古經の一課を加えるようになった。⁽⁸⁾

『學海堂志』の卷頭には學海堂人の手になる「學海堂圖」が附され、學海堂をめぐる建造物の大體を見て取ることができる。學海堂の堂宇は廣州城の北、粵秀山の山腹にある。堂中からは見晴らしがきき、はるか珠江の河口が見える。堂の背後には阮元の栗主が祀られている啓秀山房がある。堂から東に向って起伏のある陂が走り梅の花が道をほさむ。その行きついた最も高いところが至山亭である。これは揚雄にちなんで名づけられた。堂の南には藏書室が設けられている。學海堂の外門から西を望めば碧色の瓦と朱色の欄干をもった文瀾閣と相對する。道光五年阮元の命によって建造され、『皇清經解』の版本はここに收められている。學海堂の本堂ははりめぐらされた垣の中、規模は三楹九架で舊來の廣州の三大書院（粵秀・越華・羊城書院）に比べ、簡素なたたずまいを見せている。堂内、西の壁には「學海堂集序」が石に刻まれている。阮元の教學の綱領はすべてここにこめられている。北の壁の東寄りには阮元の像がやはり石で刻まれ、像の左には題記が添えられている。

道光八年四月、學海堂弟子鶴山の吳應逵、番禺の林伯桐・張杓、嘉應の吳蘭修、漢軍の徐榮、南海の熊景星・曾釗、順德の馬福安、阮夫子の像を樸刻して堂中に立て師承を志す。

この八人は當時の學長たちである。阮元は都合十八回の課試を行ってカントンを去った。彼のいいつけに忠實な弟子たちは「學海堂章程」にしたがい、一年を四つの季課にわかし一課ごとに二人が管課の學長として課試を主催した。これまで

の書院の通例とは異なり山長ではなく學長を考案したのは、山長という呼び方には學業のための書院という印象がぬぐいきれないのを阮元が嫌ったということ以上に、學長という名目ならば複數置くことが許され、經史詩賦の廣範圍にわたる課試を無理なく扱うことができるよう配慮したためであった。季節ごとの孟月の初旬、管課の二人の學長が他の六人を堂中に召集し經史・文筆・古今詩題の各々について公議する。題目が整ったら督・撫・學政の衙門をまわって裁可を請い、印刷に附したものを學海堂及び各學長の寓居に掲示、さらに各所に送付して遠近に知らしめる。肄業生は自らの長ずる題目を選ぶことはできるが課卷の提出を怠ってはならない。八人の學長は集められた課卷を分閱して評價を定める。優秀なものは裁可を得た上で掲示して膏火を支給する。選刻に價する課卷は一冊にまとめて學長が保存し、時がきたら『學海堂初集』の例に照らして出版する。

課試の實施と並んで經費の確保が書院の經營の大きな部分を占めていた。舊來の三大書院には事務局長に相當する監院が設置され經費面を擔當していた。學海堂には監院はなく學長がその任にあたった。道光六年以前、學海堂の經費はすべて阮元のポケットマネーから出ている。⁽⁹⁾肄業生の膏火は阮元が給發し、別に三百兩を文瀾書院に發して生息させていた。道光六年カントンを去るにあたって、財政的にも自立できるように官田からの收租を學海堂の經費にあて、さらに三千七百兩を寄附し前の三百兩と併せて發商生息させることにした。

官租 南海縣鎮涌海心沙坦 二頃三十七畝 每年官租一百一十八兩零

番禺縣八塘海心沙坦 二十三頃四十畝零 每年官租四百五十七兩零

息銀 發商生息銀 四千兩 每月每兩息銀一分 每年四百八十兩

官租は南海・番禺兩縣が徵收して藩庫に送り、季課に際して隨時支給する。四千兩は以前通り文瀾書院の董事四家に發せられる。董事四家とは行商を指している。嘉慶十五年廣州城西關の濠溝を疏濬するにあたって、以後の費用も確保するために行商が願ひ出て房屋を寄附し、修濠公所と名づけこれを賃貸することになった（この房屋は乾隆五十年義豐洋行の蔡昭復

がイギリス商人に支拂うべき代金を滞らせたときに官に没收されたものを行商たちが買いもどしたものである。その時、順徳出身の郷紳何太青らが修濠公所の部屋を割いて創建したのが文瀾書院である。その碑記には潘・盧・伍の三氏を頭に當時の行商十二家が名前を連ねている。粵秀山に居を定める以前、あるいは文瀾書院で課試が行なわれ、阮元は文瀾書院を學海堂にする考えに傾いていたのかもしれない。學海堂が設けられてからも文瀾書院には「學海」としたためられた額が掛けられていたと伝えられ、書院中には學海堂の名を冠した東廊がある。⁽¹⁰⁾後、行商が生息困難になったため道光十六年四千兩をひきあげ、あらためて南海・番禺・河南の典商に委ねられた。経費は學長の修金・膏火の外、零細な項目のために支出される。毎季節ごとの孟月に支發を請う文書が廣州府、次いで布政司に送られ、春には前年の支出項目の詳細を簡條書きにして廣州府・糧道・布政司・督・撫に報告する。

阮元に對して師承を誓った題記の八人は道光六年彼によつて直接任命された學長たちそのままではない。張杓は、道光七年正月趙均の後任として新たに任命された學長である。初代八人の學長が阮元によつて認められた理由は様々である。吳蘭修、曾釗は考據の學に優れているため、林伯桐は漢宋兼學、吳應達は古文、熊景星・徐榮は詩によつて認められた。その後學長が缺けた時には残りの七人が公舉するよう「章程」に定められた。三大書院の山長が著名な進士であることを要したのに對し、學海堂の學長は資格にはこだわらず素行・郷評が重んじられた。阮元が去つてから張杓に續き、張維屏（道光九。道光十八年に再び任命）、黃子高（道光十、謝念功（道光十二）、饒克中（道光十四）、侯康（道光十七）、譚瑩（道光十八）、黃培芳（道光十八）、梁廷枏（道光二十）、陳澧（道光二十）と任命されていく。この世代まではほとんどが阮元と面識があり學海堂の課試を経験して彼に認められた者たちである。學海堂が満足な形をとる以前、彼らの多くはすでにひとつのグループをなしていた。道光初年古文辭を以て互いに磨き合うことを目的としたグループ希古堂が結成される。⁽¹¹⁾會合は吳蘭修が集めた二十人足らずの同志の閒で月ごとにたれる。集りに定まった場所はなく二人が入れかわり世話をつとめる。張九齡以來、廣東に詩人の傳統はあるが古文辭の作家は少ない。古に學ぼうとする者も時文に憂き身をやつし古文辭

などは置きて講じない。清初の易堂の諸子は手本とするに足るが、史に深く經に疎い。我々は經を主として子・史で輔い、先王の典章・古今の得失・天下の利病を熟知してから文を發する。時文に對する意識、詩以外の文化を求めようとする動きは阮元のねらいと重なり合う。古文辭の會としての希古堂は數年ならずして廢されるが、學海堂の課試は經解を中心としながらも古文辭を含んでいる。學海堂は希古堂を擴張したものだといふ吳蘭修は考えていた。⁽¹²⁾道光二十年までの學長十九人の中十二人は希古堂の同人であり、學長に選ばれなかった者も『學海堂初集』に名を列ねる。

希古堂―學海堂の人々は多くが舉人として廣州の教官を経験することになる。その中で最終的に進士になった者は馬福安・徐榮・張維屏の三人に過ぎない。他のある者は會試のために幾度も上京したが報われず、あるいは受験の氣配のない者も多い。

このグループの中心は吳蘭修と曾釗であつた。やや年下の陳澧は二人を當時の廣州の〃老師宿儒〃と表現している。⁽¹³⁾吳蘭修は趙均とともに學海堂の堂宇の建築にあたり粵秀書院の監院もつとめていた。彼の〃品格〃はカントン人に高く評價されて⁽¹⁴⁾いた。曾釗は粵人の中で最も早く漢學を治めた者として賞讃される。曾釗の校注した『字林』を見た阮元はその精緻さに驚嘆し、自らが去つた後にカントンの漢學の風氣が衰えるのを慮れ、彼に後を託して學海堂の學長に任命した。⁽¹⁵⁾

だが、カントンの人々にとって學海堂の創設は阮元によって指導された地方文化事業のひとつに過ぎなかつた。前後して行われた『廣東通志』の重修、貢院の修復と學海堂は一連のものとして感じられていた。⁽¹⁶⁾『大清一統志』の重修に便ならしめるという目的で阮元が編纂を思ひ出したのが嘉慶二十三年、廣東の知識人、時には方東樹・江藩の協力も得ながら貢院に局を設けて作業を續け、道光二年には新しい『廣東通志』が完成する。卷首職名には總裁阮元、總纂として廣州在郷の進士陳昌齊・劉彬華・謝蘭生、次いで分纂として舉人吳蘭修・生員曾釗の名がまず掲げられる。分校には熊景星・饒克中の名も見える。後少しすれば學海堂の名の下にまとまることになる人々が舉人・貢生・生員として事業に参加した。⁽¹⁷⁾吳蘭修・曾釗は彼らの代表格であつた。編纂に要する費用は捐金に頼つた。

道光元年恩科の郷試の後、廣州の貢院が湫隘であると痛感した阮元は改築の見積りを劉彬華・謝蘭生らと並んで吳蘭修に打ち明ける。⁽¹⁸⁾ 吳蘭修は粵秀書院の監院を擔當していた。三大書院の山長は進士であることを要したが、監院は人望のある教官の中から選ばれた。彼らの同意を得た阮元はまず屬官の捧銀を捐出させる。これを見た省會の紳士・商人が捐金し、ついで省城外、さらに廣く府外の紳士もこれに續いた。官紳士庶の協力をうたったこの工事は道光元年の冬に始まり、銀四萬四百兩餘りをかけて二年六月に完成する。捐金の中、行商の贖金は相當部分を占めたと想像される。學海堂の創設、『廣東通志』の編纂、貢院の改築以外にもカントン時代の阮元は矢繼ぎ早に地方公事を行う。やはり道光の初め桑園圍の石隄の改築工事にあたって行商の伍崇曜（怡和行）、その姪婿の盧文錦（廣利行）は合せて十萬兩を寄附している。⁽¹⁹⁾

吳蘭修は伍崇曜と親交があった。その『南漢記』の跋は伍崇曜が書いている。この一文は活動的で自信家の吳蘭修の素顔をよく傳えてくれる。譚瑩の編纂した『粵雅堂叢書』『嶺南遺書』等は伍崇曜の援助でなつたものである。⁽²⁰⁾ 河南には潘氏の別莊萬松園があり法書名畫の收藏で知られていた。謝蘭生ら廣州の知識人はここに游んだと傳えられる。河南には潘氏（同文行）の別莊雙桐園もあった。幼い頃家庭教師として招かれた父に連れられて九年間ここに寄居した時のことを張維屏は懷しんでいる。⁽²¹⁾ カントンの人々にとって行商の大きな功績と感じられるものの一つに種痘の普及がある。乾隆の時、すでにカントンに種痘はもたらされていた。行商の鄭崇謙は『種痘奇書』と名づけた書を刊行しこの方法を廣めようと試みたが、カントン人はその効果をまだ信じなかった。その後しばらくこの方法は廢れる。嘉慶十六年再び種痘が傳えられる。行商の潘・盧・伍三氏は三千兩を投じて發衛生息せしめ、その技術を學ぶ者を養成し種痘局を設けた。局に關していくらかの曲折を経たが、その後この方法は日に盛んになったといわれる。アヘンは深く中國を毒しあるいは禁ずることができないかもしれないが、種痘の法を各省に傳えれば子供の生をのばすことで人の壽命をいくらか補えるかもしれない、と阮元は歌っている。⁽²²⁾

阮元が去つた後も吳蘭修・曾釗の働きは際立っている。道光十三年大水のために官窑の隄が決した時、曾釗は巡撫祁墳

に謀り自ら隄の修復、靈洲渠の疏濬の指揮をとった。道光十七年總督鄧廷楨・巡撫祁墳の指導の下、官紳商民の捐金によって平糶惠濟義倉が設けられる。區玉章・陳其銓らの進士に混り吳蘭修もその建築にあたった。捐金總額十二萬四千九百八十二兩の内、伍崇曜をはじめとする行商の獻金は四萬六千兩を占めた。⁽²³⁾ 吳蘭修・曾釗に比べて、彼らよりやや遅れる譚瑩・梁廷枏（『粵海關志』の編者、『海國四説』『夷氣聞記』の作者）・陳澧の方が我々には馴染み深い。しかし彼らがカントンの社會で活躍しはじめるのは道光二十年を越えた頃からである。

カントンの公事に積極的であつた阮元・祁墳は名宦と讃えられ慕われた。だがそれ以上にカントン貿易を彼らがいかに扱うかにカントンの紳士たちは注目していた。羈縻して斷つことなかれを銘記して眼前のカントン貿易に不測の事態を起こさないこと、しかし同時にややもすれば舊例を亂す外國商人を抑え、アヘン問題に消極的でないことも人々は望んでいた。北京の人々には解決を避けているとしか映らなかつた阮元・祁墳・盧坤もカントンの人々には慎重な好ましい態度に見えたが、巡船を設けてかえってアヘンの内地流入を誘つた李鴻賓、さらに鄧廷楨には不満を感じていた。⁽²⁴⁾

學海堂の人々にとって會試受験のための上京は他の地域の知識人に觸れる數少ない機會であつた。龔自珍・魏源・徐松と吳蘭修は北京で知りあつた。龔自珍の文章は吳蘭修にとつても印象的だつた。定盦の文は人が學ぶことのできるものではないしその必要もない——吳蘭修と魏源の考えはこの點で一致していた。⁽²⁵⁾ 三人と交際を持ったことは吳蘭修にとって名譽なことであつた。著述家の三人に硯を贈ることは硯にとつての幸福であるだけでなく自分にとつての快事でもあると徐松に宛てた書信の中で吳蘭修は述べている。もつとも、端溪の極上品を贈つたのに龔自珍はその値打ちを認めようとはしないとその中でこぼしてもいるのだが。⁽²⁶⁾ 道光二年進士となり北京に留まつた張維屏は龔自珍・魏源・林則徐・黃爵滋・江開らと交際があつた。張維屏について「詩壇の大敵、北京に到る」と語る者もあつた。張維屏と北京の知識人との親しい交際から彼は宜南詩社の同人であるとされることがある。

道光十二年、北京の知識人の中心であり、阮元と並び稱された程恩澤が鄉試の正主考官として來粵したことは、學海堂

の人々の記憶に長く残るべきことだった。かねてからその學説に敬服していた學海堂の曾釗を郷試第一人に擧げること胸に程恩澤は廣州に來た。おりしも曾釗は喪に服しており郷試を受験していなかった。發表を見て程恩澤はひどく失望した。この時陳澧・溫訓・儀克中の三人は舉人となる。撤闈の後、程恩澤は曾釗の家を訪れ、さらに吳蘭修ら數十人と白雲山に遊ぶことを約した。日展べすること九日、白雲山蒲澗の雲泉山館でカントンの名士を集めて會は開かれた。程恩澤は曾釗の著作『周易虞氏義箋』の序を書き「蒲澗雅集圖」を描いた。吳蘭修は雄談を好み、曾釗は沈黙を好む、吳が青鸞ならば曾は香象、というのがこのときの程恩澤の印象だった。⁽²⁷⁾酒酣になる頃、程恩澤は嘆息している。現在のカントンは繁榮の極みにある。しかし繁榮が極まれば衰える。今から二十年後、亂はカントンから起こり、さらに十年後には天下に蔓延するだろう——。洪範五行の説に凝っていた曾釗と程恩澤との間に暫くやりとりがあり、愁い極まった曾釗はすすり泣きだしてしまう。それを見て程恩澤は笑いながらいう。君と私はこの亂をみることはないだろう。座中でその時まで生き延びているのは譚瑩だけにちがいない——。太平天國、その後の内憂外患に際して譚瑩はこの不吉な豫言を思い起こすだろう。⁽²⁸⁾

カントンに留まっている時の程恩澤に雜感詩九首があり、道光十二年當時のカントンの様子を陰鬱な調子で描寫している。揚子江沿岸地域ではうち續く水害と旱害のために人々は購賣意欲を失い、洋貨をさばけないカントンの商人たちは財産を損ない悄然としている。カントンの吏治・民風は日に薄きにおもむき、白日の下強盜・人さらいが横行する。その中であって學海堂が阮元によって開かれ士氣文風が日に進んでいるのは喜ばしいと程恩澤には感じられた。學海堂と並んで程恩澤に強い印象を與えたのは、貧富を問わずカントン社會にアヘンが蔓延していること、アヘン貿易が野放しにされていることだった。カントンでは乞食までがアヘンを吸っていると程恩澤は述べている。⁽²⁹⁾

二 カントンとアヘン論議

a 吳蘭修と「弭害」

道光十六年許乃濟のアヘン弛禁上奏が吳蘭修の原稿に潤飾加筆したものであることは、カントンの多くの文獻が記している。その中、梁廷枏の『夷氛聞記』⁽³⁰⁾ 卷一の記述は吳蘭修の「弭害」本文も含み、詳細さにおいて際立っている。要旨だけをとれば「弭害」は許乃濟の上奏と異なる所はないが、⁽³¹⁾ 本來、より緊密な構成を持ったこのテクストの細部に注意し、他のいくつかの報告をそれに重ねれば、これが作成された道光十四（一八三四）年六月から九月、さらにその前後の時期カントンが置かれていた具體的な情況に對するカントンの人々の見方を斷片的にはあるが何う手掛りとなる。そのひとつは北京中央に對するカントンの人々の意識であり、いまひとつは當時の貿易情況の變化、即ち東インド會社の對中國貿易獨占權の廢止という事情が翳を落しているということである。後者について有利な立場にいる後代の私たちは筋の通って整った理解をもっている。情況の中にいた一八三四年のカントンの人々の眼には、はるかに不透明なできごととして映った。だが彼らも情況が變化しつつあるとは感じていた。

道光十三年、公司（イギリス東インド會社）は連年の不振、定められた（解散）期限をとうに越えていたことから、會社を解散してほしいという臣民の請願を聞き入れ、もともとの資本を國に返還した。カントンに來る散商（自由貿易商人）は益々多くなり、通常の商品では壟斷にままならぬため資金を分つてアヘンを運んだ。光祿寺卿の許乃濟は廣東の道臺（高廉道）であった時、文告に頼っていては禁止することはできず害はとどまるところを知らないということを知り、を熟知していたのでかねてから隱憂を懷いていたが、根本的に解決するてだてを得ていなかった。その同年の進士

である順徳の何太青は仁和の知縣から嘉興海防同知に拔擢されたが、職を免じられてカントンに歸つてきていた。何太青は許乃濟とうまが合った。彼は從容として言った。「アヘンとひきかえに出ていく紋銀は數知れない。まず例禁を解いて民間で罌粟を植えることを許すべきだ。國內の生産が盛んになれば吸う者もしいに國內産の値が安いことを利とし、おのずから販路も廣がる。夷商も利益がなければ招いても來ないだろう。それでも來るのであれば思い切つて關禁を弛め（アヘン貿易を合法化して）高税を徴收し、バーター貿易にすることを行商に要求して銀で買うことに對する罪を重くすれば、二十年経たないうちに禁じなくてもアヘンはおのずから絶えるだろう。實に中國の利病の鍵である。どうして思い切つてこの考えを申し上げないのか。」許乃濟は大いに動かされ、このことを教官（信宜縣訓導）で（粵秀）書院の監院であつた吳蘭修に尋ねた。吳蘭修は嘉應州出身の知名の士であり、見聞が廣く世事に明る

いことが自慢の者である。吳蘭修も何太青の言葉に贊成し、退いて「弭害」論を書き充分に述べ立てた。

續いて「弭害」本文、これを見た總督盧坤・巡撫祁項が心服したこと、吳蘭修は學海堂の學長である熊景星・饒克中に頼んで援護の論を書かせ、盧坤はこれを「粵士私議」として上奏に添えたが、禁令の嚴しい折柄、内容をはしおり明らさすには弛禁を願ひ出なかつたことが述べられる。

梁廷枏の東インド會社の記述には後に得た知識が入りこんでいる。會社の不振、「解散」に至る事情などは英國史（『蘭寄偶說』一八四六刊）を準備する時に得た情報であろう。⁽³²⁾一八三〇年代前半のカントンはこのような整つた情報は入ってゐなかつた。しかしそれをさしひいてもそつてなく並べられた東インド會社の「解散」、來粵の「散商」の増大、彼らの持ち込むアヘンとカントンにおける弛禁論のきざしとは關連があると豫想させる。解散の消息は、道光十年十二月「大班」（東インド會社管貨人委員會の首席）から行商を通してカントンの傳えられた。内容は「道光十三年以後、期限の切れた東インド會社は解散する。以後公司の船が貿易のためにカントンに來ることはない。將來カントンに來るイギリス船はすべて散商のもので「港脚」（自由貿易商人）の船と變わるところはない。」⁽³³⁾という簡潔なものだつた。解散の理由などは一切

明らかでなかった。この知らせは驚きと不安とを惹き起こした。解散が及ぼす影響については議論があったらしい。⁽³⁴⁾ いずれにせよ問題の焦點は公司解散後の散商にあった。公司の大班の管束の下にあった時でさえ従順ではなかった散商をいかに統制するか、彼らが中國の法令に違反した場合誰に責任を問うのかを中外間の直接の交渉にあたる行商は懸念した。總商の任にあたっていた伍受昌・盧文錦・潘紹光等はこの情報を總督李鴻賓・粵海關監督中祥に伝え、大班マージョリバンクス（嗎咭呼 C. Marjoribanks）に命令し、早急にイギリス國王に書信を送り公司が解散しても大班を設置するのか否かを問い合わせることを請願した。公司の解散について中詳は懷疑的であったが、李鴻賓は行商の意見にしたがい公司が解散するのならば事情に明るい大班を派遣して貿易を總理させるように傳達させた。⁽³⁵⁾ 李鴻賓を繼いだ盧坤は道光十四年三月、公司解散の理由を大班に問いたですよう重ねて行商に命令した。公司の解散期限は以前から定められていたもので今さらどうにもならない、散商による以後のカントン貿易の章程はまだ明らかではない、イギリス本國からは「大班」ではなく「夷官」が派遣される、というのが回答であった。⁽³⁶⁾

現實には一八三四年四月二日を境にすぐさま自由貿易商人の數が増大し、それらの運ぶアヘンの量が急増したというわけではなかった。自由貿易商人によるアヘン貿易の、東インド會社の對中國貿易に對する侵蝕は以前から着實に進行したもので、一八三四年四月二日はある意味でその事後確認にすぎなかった。⁽³⁷⁾ しかし道光十四年半ばから道光十五年初めにかけての上奏の中で盧坤は「本年該國來粵の商船、往年に較べて更に多し」⁽³⁸⁾（十五年正月）「現在公司已に散じ、乗る所の夷船、散慢無稽」⁽³⁹⁾（同上）と訴えている。盧坤には理由もなく突然のことに思われた東インド會社の「解散」はそのままカントンの集まる散商の増加、無統制、さらに彼らの持ち込むアヘンの量の増大と感じられた（現在、外洋の私に鴉片を販するの夷船日に多し）⁽⁴⁰⁾。カントンの士大夫たちも同じように感じ、あるいはそうなることを懸念し、それが弛禁論を生み出していくことを梁廷枏の『夷氣聞記』の記述は示している。道光十四年廣東の郷試でアヘンの嚴禁策・吸烟の風俗を革める方法が策問として生員たちに問われたのは様々の意味で象徴的

なできごとである。⁽⁴¹⁾

『夷氛聞記』に引用された「弭害」は、吳蘭修の文集『桐花閣文鈔』から抄録したもので末尾と註を缺いている。これを『光緒 廣州府志』卷二六三「雜錄四」に引用されたもので補えばほぼ原文の體裁を窺うことができる。

I 「害至るも策なきに幾し」(非常の策を講ずる必要のあること)

II アヘンの害

a 人に及ぼすアヘンの害(利一害百)

b 國に及ぼすアヘンの害——銀の流出(無纖末之利、有莫大之害)

III 從來の方策に對する批判

a カントン貿易を斷つこと(拔本塞源の説)に對する批判

b 法令を嚴しくすること(嚴法例禁の説)の無效

IV 弛禁

a アヘンを合法化して課税し茶との物々交換にする。行商に扱わせる。

b アヘンの内地栽培を許す。

c 洋銀の持ち出しは許すが、紋銀を含めた内地の銀の持ち出しは嚴禁する。

V 豫想される反論に對する回答

a 人の生命を傷ることへの懸念に對して

b アヘンの内地栽培が他の作物の妨げになるという考えに對して

VI 國內の栽培が盛んになれば利を失った夷商は來なくなること、内地のアヘンは害が少ないこと

天下の害は常に利と相關している、と吳蘭修は考える。上なる者は利と害が等しく、その次が利が一で害が十、甚しい時には利が一で害が百のことすらある。今、人體に與えるアヘンの害は「利一害百」に相當するが、銀の流出が國に與える損害は「利一害百」どころか「纖末の利なく莫大の害あり」である。「弭害」の策も三つのケースが考えられる。上なる者が「拔本塞源」、中なる者が「嚴法例禁」、そして「避重就輕」が下策である。現在上・中の二策はいずれも無効である。したがって銀の流出を留めることを優先し、下策ではあるが「重きを避け輕きに就く」策が講じられねばならない――。吳蘭修も人體に及ぼすアヘンの害を言葉盡して説いている。「士大夫より以て販賣走卒に至るまで、群れてこれに赴き靡然として返らず」とは程恩澤が見た一八三二年のカントンの現實を別のことばで表現しているにすぎない。だが一人の人間だけを見ればアヘンの及ぼす害は重く銀の問題は輕いが、天下全體からすればアヘンは輕く銀の流出が重い、として弛禁論のための布石とするのである（I・II）。

吳蘭修のいう「拔本塞源の説」（III-a）とは一時的あるいは永久にカントン貿易を閉鎖し海禁政策をとることを意味している。このことばの使い方は確かに包世臣を意識している。嘉慶二十五年「庚辰襍著二」中の包世臣のカントン貿易斷絶論と當時廣州府知府であつた程含章の「論洋害」とは互いに意識したものであること、その間に吳蘭修の入つていた可能性のあること、包世臣の論の奥には行商に對する抜きがたい不信感があることはすでに指摘されている。⁽⁴²⁾「弭害」の部分には包世臣に對する程含章の批評をいくらか丁寧に行っている。貿易を絶つたらイギリスをはじめとする西洋諸國が黙視しているはずのないこと。生業を失う數十萬の瀕海の民衆。彼らの惹き起こす東南の患。もしそれがなくても蛟門の外に島を擇んで塵とし、天津・江・浙・閩・廣の船と通じるにちがいないこと――。北京の知識人の考えに對してカントンの人々は神經質になつていた。龔自珍に今は佚文となつてしまつた「東南罷番舶議」と名づけられた一篇がある。張維屏は強い言葉で評している。龔定盦の文はややもすれば數千言に及ぶ。「東南番舶を罷むるの議」。考えてもみるがよい。西洋との貿易はすでに數百年に及ぶ。近年その來たる者は益々速かに、益々横暴になつてゐる。誰が貿易を斷つこと

ができようか。これは断じて行ふことのできないことである。定憲が得意の一文と考えているのは謬っている——(43) 行商、粵海關をめぐる官吏に對して不信感しか持てなかつた北京の知識人たちの幾人かは、どうしても貿易斷絶論に傾きがちであつた。道光十四年、弛禁論の萌していたカントンを張際亮は訪れていた。吳蘭修・陳澧との交際の記録が残っている。すでに躉船の存在を知っていた張際亮は、今日の情況から判斷して貿易斷絶は不可能であるから、まず「快驪」「窑口」の取り締りから始めよと盧坤に勧めている。その張際亮も、浴日亭に登りはるか彼方に大砲數門を備えた夷船を認めた時、粵海關の稅百六十萬など中國にとって無用のものだと思わず言い放つのである。(44) 程含章は「論洋害」の最後で、アヘンの害を充分承知しながら將來の機會に待つことを勧めている。同様にアヘンが中國に破局をもたらすであらうことを豫測しながらも、根本的な解決を避けて「暫く羈縻を事とし、徐ろにこれが計を爲す」ことを密奏した阮元は、貿易に頼つて生計を立てている内地の商民に思いやりを示したとカントンの士大夫に高く評價される。(45) 「ただ羈縻を事とす」(46) 「邊釁を啓くなかれ」は多少の表現の差はあれ、カントンの士大夫たちの口の端に繰り返しのぼる決まり文句である。しかし貿易斷絶論に對するカントンの士大夫の時代を問わない反感というにとどまらない事情がこの時にはあつた。銀の國外流出を述べた「弭害」の一節(Ⅱ—b)には、カントンにおけるアヘンの取り引きの實際を明らかにする割註がはさまれている。

零汀洋は蛟門に近く、四方に通じ、一年中六、七隻の大船が停泊している。これは「躉船」と呼ばれている。アヘンを船艙に貯えた洋船はまず老萬山に入り、はしけで躉船に赴き(アヘンをそこに下してから)海關に入る。省城のアヘン買いつけ商人たちは「窑口」と呼ばれている。彼らは銀號を通して金を拂い、洋館で書きつけを受取つてから躉船に行きアヘンを引き渡される。その行き來の際の護送の武裝船は「快蟹」とも「扒龍」とも呼ばれ、數十人のあらくれが操り、飛ぶような速さで走る。

これは道光十四年五月二十二日の上諭に引かれた「有人奏」をほぼそのまま使つたものである。(47) 躉船の驅逐、快蟹の査拿

を命じたこの上諭に對する回答が九月初十日兩廣總督盧坤、粵海關監督彭年の奏覆であり、これに添えられた附片の中で弛禁論が打診される。⁽⁴⁸⁾『夷氛聞記』の「盧坤はこれを『粵士私議』として上奏に添えたが……」という記事はこの上奏を指している。「弭害」と盧坤の上奏は表裏をなしている。

道光十年代に入り銀の流出がアヘンの流入によるとの認識が固まるとともにアヘン論議も多様化を見せる。道光十年六月二十四日江南道監察御史邵正笏の上奏に従い、國內アヘンの種賣を禁ずる章程を作製することが各省の督撫に命じられる。道光十一年五月十五日には、販烟者の手掛りを得るために食烟する者の罪をさらに重くすることが兵科給事中巡視西城御史劉光三によって提案され、六月十六日刑部の同意を得た。劉光三の上奏と同じ頃、カントン出身の御史馮贊勳の奏摺が明らかにされる。⁽⁴⁹⁾前年の邵正笏の上奏を念頭におきながら、内地の種烟は斷ちやすいが外洋から流入するアヘンはまづカントンに集まっているのだから源から絶つためには事をカントンから始める必要がある、と説くこの奏摺は「鴉片薹」

(薹船のこと)、省城内十三行聯興街に密集する「大窑口」、「快鞋」、李鴻賓の設けた「巡船」、「小窑口」の實態を暴いている。これによってカントンにおけるアヘン貿易の像が焦點を結ぶこととなる。七月四日兩廣總督李鴻賓らに上諭が下され、上奏が事實に本づいているのか否か調査が命じられた。道光十二年には「洋面の私賣、快艇の走私」を查禁する旨の上諭が重ねて下された。吳蘭修の「弭害」が引いている上諭中の「有人奏」は、その二年後にカントンにおけるアヘン賣買に對する禁令が一向に効果を表していないことを「薹船」という新しいことばと共に明らかにしていた。カントンにおけるアヘン貿易の實態は多くの人々をいつそう驚かせた。以後多くの文章にこの「有人奏」からの引用が見られる。薹船の驅逐、快艇の查拿を嚴命した上諭の口調はこれまでになく嚴しいものだった。原因の一つはアヘンだけでなく關稅の高い正規の商品も薹船によってひそかに賣買されていると「有人奏」が指摘していることにもあった。

本奏の中(50)で盧坤は、火器をもって夷船を驅逐してはならない、「示威の中、なお懷柔の義を寓すことを期せ」とした道光帝自身の以前の上諭をさりげなく折り込みながら薹船を驅逐することの困難さを繰り返して説いている。「走私を嚴拿す

「ること、即ち快蟹の査拿が盧坤の説く方法だった。だがこの方法の効果についても盧坤は悲觀的だった。「附片」⁽⁵¹⁾では前年の Syha 號の「北竄」の記憶を喚起しながら、躉船の驅逐が却ってアヘン貿易の擴大を招く不利な策であることを重ねて印象づけた後、結局現状は「驟かには挽回し難し」と盧坤は告白せざるを得なかった。こうして廣く意見を求めた結果として吳蘭修の「弭害」が紹介される餘地が生まれる。ここでは「弭害」の論旨は、アヘン貿易を合法化してバーターとすること、アヘンの内地栽培を許可することの二つに分たれ、あたかも二人の意見であるかのように紹介されている。だが『夷氣聞記』も記しているように「その説均しく見る所無きにはあらざれども、然れども例禁と違ふあり。窒礙行い難し。」と氣を引いてみせるに留めている。續いてひとつの考えとして貿易斷絶説を紹介し強く否定する。説く所は吳蘭修の「弭害」と異なるところはない。從來の通り「暫く羈縻約束をなす」ことに盧坤の結論は落ちつく。含みの多い盧坤の上奏からもその實體が明らかとなった躉船に觸れることを避けようとしていることが見て取れる。當時のカントンでは爭端を開くことを恐れて一部の躉船を一罰百戒のために驅逐することすらはばかる聲があった。⁽⁵²⁾彼がわざわざ貿易斷絶論を紹介しそれを斥けてみせたのは、道光帝の上諭が豫想以上に厳しく、北京が躉船の驅逐にとどまらないで斷絶論にまで傾くことを畏れたためと思われる。同様に吳蘭修の「弭害」が貿易斷絶論をとりあげているのは、包世臣・龔自珍といった論者を念頭に置いているだけでなく、カントンのアヘン貿易の實態が全國的に明らかにになったという新しい情況に對する懸念が働いている。アヘン貿易を合法化してしまえば中央からの視線を氣に病む必要はなくなるだろう。

「嚴法例禁」説の無効を説く部分(III-b)では、胥吏が法令を利藪とみなし法を厳しくするほど「索賄」「包庇」「護送」を助長すること、官役を僞る者があることが手短かに述べられ「前車の轍、鑒みるべし」と結ばれる。その後に「近日、水陸に官役に假り、鴉片を搜すを以て名と爲し、機に乗じて劫を行ふもの多し」という割注が添えられている。これは一般論を説いているのではない。カントンの現状をそのまま描いているだけである。四年前李鴻賓の六條の章程はこの弊害をすでに指摘し、これを禁ずる爲につくられたものである。⁽⁵³⁾四年後章程が無効であったことを吳蘭修は報告している。

「弭害」の弛禁を展開した部分（Ⅳ以下）の論旨は何太青のアイディアに盡きる。『順德縣志』の傳には行商と彼とのつながりを感じさせる記事はないが、行商の志願で文瀾書院が設立される時、その許可を願ひ出たのは何太青である。道光六年に形を整える以前から學海堂の資金の一部は文瀾書院の生息に頼っており、文瀾書院の建築には學海堂の名残りが感じられる。學海堂の學長であった吳蘭修の「弭害」が「行商の利害を代辯している」というのは、道光十四年當時行商が疲弊していたという事情を配慮した、という意味でなければならぬ。⁽⁵⁴⁾道光十六年、學海堂の預けた四千兩を文瀾書院の董事から引きあげざるを得なかったのはその事情を暗示している。道光十三年、行商の税餉の欠額總數は一三〇萬餘兩に達していた。その一部は期限を切って追徴したが、それでも三十九萬餘兩は未納であった。「各商、歷年の賠疊過^{はな}だ重く、現在新餉緊急、貨物滯銷するを以て、節次稟もて限を寛められんことを求む。……近來洋商の股實なる者一、二家に過ぎず、……實に筋疲力盡くるに屬す。」と盧坤は報告している。⁽⁵⁵⁾十二年當時カントンは商品が擁滞しているという程恩澤の報告は行商自身の疲弊に原因がある。行商は貿易品としてアヘンを取り扱うことはできなかった。したがって行商—東インド會社の貿易よりも自由貿易商人と中國のアヘン商人との間のアヘン貿易の方が大きくなっていったこと自體大きな問題であったが、本來行商の扱うべき貿易品すら資本が乏しいために自力で處理することができなかった。すでに道光九年「數年以來夷船日に多く税課日に旺んなり。而れども行戸反って日に少なく、買賣事繁く料理周到たり難し。勢い行夥を用いざる能わず。是に於て走私漏税、勾串分肥、その弊百出す」と報告されている。⁽⁵⁶⁾當時行商は七行しかなく、それ以外の六行は經營不振、資本の涸渇のために續々と業務を停止していた。この年より行商採用の資格が改善されたために、道光十三年の行商の數は十行に増えている。しかし數こそ整えたものの道光十四年五月二十二日の上諭に對して盧坤ははじめアヘン以外の正規の貿易品が躉船で密賣されている事實はないといっているが、半年後にはやはりその事實を認めている。⁽⁵⁷⁾窮乏し獨占體制の搖らいだ行商と東インド會社の「解散」後増大しつつあると感じられた「散商」とのあざやかなコントラストを「弭害」の作製された數箇月後に盧坤は報告している（「夷商の粵に來たる者日に多く、洋商の股實なる者

(58) 幾くもなし)。このような状況を豫測すれば、その扱い範圍外にあり利の多いアヘンを正規の貿易品として行商に扱わせることは確かに行商の再建に効果があると思われれる。

「公司の解散」のいまひとつの結果が道光十四年六月九日から八月十九日までのネピア (William John Lord Napier) 事件であった。これについてはすでに詳細な紹介がある。(59) 東インド會社の對中國貿易獨占權の廢止に伴い、從來の「大班」に代つて本國から派遣された貿易監督官ネピアは六月九日澳門に到着した。四月、中國の要求した「大班」ではなく「夷官」が來るとの情報にすでに接していた盧坤は驚きを隠せなかった。カントンの兵船の警備はすでに固められていた。六月十九日ネピアはカントンのファクトリーに入る。同日、總督に會見を求める書信を「稟」の形式ではなく對等の書翰の形式で、公行を介さずに直接官人に渡そうとした。この試みを拒んだ盧坤はネピアを澳門に退去させようとする。十二日行商は船積みの停止を決定し、二十九日には盧坤が對英貿易の停止を布告、買辦・通事を撤退させる。ファクトリーは封鎖された。これに對してネピアは軍艦二隻を呼びよせる。二隻は珠江を溯り虎門・沙角・大虎の各砲臺の下を過ぎ、八月九日省城まで六十里の黃埔に停泊した。貿易の再開を願う一部のイギリス商人の動きとネピア自身のマラリアのために八月十九日ネピアはカントンを離れ騒動は終りを告げる。八月二十七日貿易が再開された。

この事件に關する盧坤の奏摺、行文、行商への批文が豊富なのに較べて、カントンの士大夫の記述は乏しい。しかし廣州城内の人々にも危機感伝はつていた。郷試が行なわれていた城内では(梁亞發が『勸世良言』を散布したのはこの時である)戒嚴令が布かれ、兵辦は堆卡を設け巡察に忙殺されていた。(60) ネピアは自らの主張、來粵の目的を印刷し、カントンの人々の間に流していた。

この事件を傳える奏摺の中で印象的なのは、決裂を避けるために粘り強く交渉を續ける盧坤の姿よりも、東インド會社の對中國貿易獨占權の廢止によって、從來の東インド會社の「大班」に代わりイギリス國家を代表する官吏である貿易監

督官がカントンにとどまり中國の地方當局と直接對峙することになる、という中英貿易史の大きな轉換點を實際に目の前にしながら、どうしても得心のいかない彼のその様子である。當初ネピアが何の目的で、いかなる資格でカントンに派遣されたのか理解に苦しんだ盧坤は行商の伍敦元を通して何度もネピアに問いただした。自分は夷官の監督であり従前の大班とは比較にならない、以後一切の事は舊來のように行商を通すのではなく各衙門と直接文書をかわすべきだと回答し、實際にそのように要求したネピアに對し「暎夷の貿易、向に洋商と大班人等由り經理し、從えて夷目の干預する無し。今忽かに官を設けて監督せんと欲するは已に舊制と符せず」⁽⁶¹⁾と從來の、そして將來にわたってもそうあるべきカントン體制からの個人的な逸脫としてネピアを認識しようとしていた。事件が終熄した後も前の例にならって「大班」を派遣しカントン貿易を管理させてほしい旨を再び商人を通してイギリス本國に伝えさせることになる⁽⁶²⁾。

だが「公司の解散」によって中英貿易の事情に變化の兆しが見えることは盧坤も認めていた。翌道光十五年正月には「商多く人雜にして事に統屬無し」というカントンの不安な現實に鑑みて、貿易を整理するため八條にわたる「防範貿易夷人酌増章程」を從來の章程に加えることが盧坤・祁墳等によって提案される⁽⁶³⁾。やはり同年、ネピア事件の教訓から、カントンの海防を整飭することをうたった『廣東海防彙覽』の編纂が盧坤の提唱で始まる⁽⁶⁴⁾。廣東海防書局は越華書院に置き、梁廷枏を中心に纂修として吳蘭修・曾釗・林伯桐、收掌として熊景星・儀克中が編纂に参加した。『彙覽』は文字通り明代以降のカントンの海防に關する文章を時に簡潔なコメントを添えながら並べたもので、盧坤を繼いだ鄧廷楨の時にほぼ整理を終えたと思われる。單に軍事的な沿革に終始せず、卷三十六、三十七「馭夷」では中英貿易の歴史が奏摺を中心に會典・地方志を混えながら回顧され、全卷の記述は卷四十二「事紀四」のネピアに對する盧坤の報告を以て閉じられる。海防書局では「海外舊聞」も採集されたと梁廷枏は記している⁽⁶⁵⁾。道光十七年粵海關監督豫堃は『粵海關志』編纂のために局を設け梁廷枏を總纂に任ずる（曾釗という説もある）⁽⁶⁶⁾。粵海關志局は梁廷枏が監院をつとめていた越華書院に置かれた。書院の紅雲明鏡亭で粵海關の檔冊を仔細に検討しながら、カントンの知識人たちが西洋諸國の「島嶼強弱・古今分合

之由」に眼を開いていくありさまを丁寧「論梁廷枏」はみずみずしい筆致で描いている。林則徐がカントンを訪れ『四洲志』の編纂を思い立つ數年前のことである。『廣東海防彙覽』『粵海關志』編纂の折に書き留めておいたものに、通事・行商の口述、さらに西洋人の著作の漢譯を利用して成ったのが梁廷枏の『海國四説』（道光二十四年～二十六年）である。⁽⁶⁷⁾ その一部『蘭荷偶説』では、道光十年當時カントンの人々にとって突然のことに思われた「公司の解散」も、本國における以前からの「散商」の運動、會社の不振によるものであると記すまでに鍛えられていた。⁽⁶⁸⁾

東インド會社の「解散」によって「散商」（自由貿易商人）に對する統制が無くなるという思いがけない事情は、流入するアヘンの増大、「散商」を統制・處理しきれない行商の窮乏という現象を際立たせるように感じられた。これまでのすべての方法を排してアヘンを合法化してしまうという吳蘭修の不道德なアイディアは、確かにアヘン問題に對するでだてとして考案されたものであるが、それ以外の可能性も含み込むことのできるものだった。カントン體制の要に位置する公行の獨占體制をたて直すこと。ネピア事件の記憶も生々しく、しだいに事情が變化しつつあると感じられるカントンにアヘン問題をひきがねとして不測の事態を惹き起こすことがなくなる。道光十四年當時、カントンにおけるアヘン貿易の實態が再び明らかにされたため北京からの壓力が高まることをカントンの人々は懸念していた。

b 溫訓と「弭害續議」

實は、アヘンの禁を弛めることを請願した許乃濟の上奏の原稿は吳蘭修に本づき、アヘンを嚴禁して吸烟者を死罪にすることを求めた黃爵滋の奏稿は溫訓に本づいている。その後、反覆展轉、遂に中國の大患を釀成し、すでに三、四十年になるがまだ落ちついていない。吳蘭修、溫訓とともに嘉應州の人で、二人とも粵秀書院の東齋に寢起きしていた。私は二人と親しく、兩人の原稿に目を通した。二人はちょっとした手だてを考案し經世濟民のことを談じては喜んでいたが、ここまで決裂するとは思わなかった。「治人ありて治法なし」とはまことにその通りである。

譚瑩の『樂志堂文集』卷十一の記述はほぼそのまま（同治）『南海縣志』卷二十六「雜錄下」に引用され、末尾に「桐花閣集・登雲山房文稿・采訪冊參脩に據る」とある。吳蘭修の「弭害」が「桐花閣文鈔」に収められているように、溫訓の原稿も當初その文集『登雲山房文稿』に收録されていたことを窺わせるが、後、刪除されたようである。⁽⁷⁰⁾

この事情を伝えるいまひとりの人物陳澧は、溫訓に對する祭文「祭溫伊初文」⁽⁷¹⁾に「信宜の訓導吳君蘭修、論を著して曰く、弭害。鴉片當に開禁すべきことを言う。君、論を著して之に駁して曰く、弭害續議。當に限を勒して戒めしむべきを言う。鴻臚寺卿黃爵滋、君の説を取り奏して之を行なう。」と記している。溫訓の原稿は、吳蘭修の「弭害」に反駁するために作られ「弭害續議」と名づけられた。二つの原稿の製作時期は接近していると思われる。

溫訓の生涯のまとまった記述はない。學海堂の人々の文章に残る斷片的なプロフィールをよせ集めれば、溫訓、字は伊初、登雲山人と號す。長樂縣（嘉應直隸州に屬す）の人、乾隆五二年に生まれ、咸豐元年三月三日、六十四歳で没す。カントンにおける經驗は學海堂の他の知識人と違いはない。七歳で郷塾に入り十歳の時に科擧の勉強を始める。二十歳で生員となり、粵秀書院で學ぶ。院長であった許乃濟に大いに囑望された。道光元年、希古堂のメンバーに名を列ね、阮元が學海堂を創立するやしばしば課試で優秀な成績を得る。その答案「崑山顧氏日知錄跋」は『學海堂初集』に收められている。道光五年拔貢、十二年舉人。數萬言に及んだ天文・地理・算法の答案を主考官程恩澤は絶賛した。その後幾度も上京したが會試にはついに合格しなかった。道光三十年博學鴻詞科が開かれると聞き應じようとしたが、まもなく沙汰やみとなったため鬱々として樂しまなかった。咸豐元年最後の會試に失敗してカントンに歸った直後に死んだようである。半生の精力を古文辭に費したと自らいうように古文の才で名を馳せていた。學海堂の學長に選ばれることはなかったが、吳蘭修・曾釗・張維屏・譚瑩・陳澧と最も親しかった。その文章のいくらかは『廣東文徵』に採録されている。⁽⁷²⁾

溫訓に道光二十五年に編纂した『長樂縣志』十卷がある。それを景印したものに「五華詩苑」若干卷が附され（新修方志叢刊所收）、陳瑩氏が溫訓の事跡を紹介している。

道光十五年會試のために北上したが合格せずそのまま京師に留まった。曾卓如は溫訓を順天府尹署教讀に招いた。そこで黃爵滋・湯鵬・孔繼鏐・張際亮らの俊才たちと古文結社を結び都下を傾動した。十八年郷里に歸る。

前後の記述が正確であることから見て據りどころがあるのだろうか、示されていない。黃爵滋に『僊屏書屋初集年記』という著作がある。年ごとに自らの事跡と交際のあった人々から贈られた詩・書札を並べたものである。卷二十三、道光十八年に「道光戊戌四月初十日、封奏一件を遞す」とある。「封奏」とは嚴禁上奏（「嚴塞漏卮以培國本」）を指している。その前年道光十七年には七月八日山東正考官に、十月十八日右翼宗學の稽察を命じられたことをまず記し、次いで溫訓の詩二首を掲げる。一首は山東に赴く黃爵滋を送る詩であり、一首は冬至の日黃爵滋のすまいに客の一人として招かれた時のものである。

嚴禁上奏の原稿作製者についてはすでにいくつかの説があり、黃爵滋一人の手になるとは當時から思われていなかった氣配がある。そのいずれもが張際亮・江開といった黃爵滋の周邊の北京の人々である。⁽⁷³⁾陳槃氏の記述によればこのグループの幾人かと溫訓は親しかったことになる。黃爵滋あるいは彼らによって現在見ることできるような形の上奏に文章として練り上げられていく経過はともかく、上奏の要となる想は溫訓から得た可能性がある。道光十四年、吳蘭修の「弭害」の後を追ってカントンで書かれた「弭害續議」の原稿を北京に留まった溫訓は黃爵滋らに見せたか、あるいは内容がかいつまんで話したのではないだろうか。溫訓から話を聞いた陳澧、原稿に眼を通した譚瑩はいずれも黃爵滋は溫訓の説を取ったと明言している。尙書酒誥の「群飲す。汝佚せしむること勿れ。盡く執拘して以て周に歸れ。⁽⁷⁴⁾予其れ殺さん」から想を得て、期限を設けて禁煙を求め、それができない者は死刑に處すという「弭害續議」の考えはそのまま黃爵滋の嚴禁上奏の主張となっている。

I 「國用いまだ充たず、民生裕かなること罕なり」

Ⅱ アヘンの流入と銀の流出、銀貴錢賤、奏銷・税課への障害

Ⅲ 従來の方策に對する批判

a 「嚴しく海口を査し其の出入の路を杜ざす」法の無效

b 貿易斷絶說に對する批判

c 「興販を査拏し嚴しく煙館を治むる」法の無效

d 弛禁論に對する批判

Ⅳ 嚴禁論——一年の期限を與えて禁煙させる。期限がきても改めない者は死罪にあてる。

Ⅴ 嚴禁論の具體的な施行方法⁽⁷⁵⁾

黃爵滋の嚴禁上奏の組み立ては許乃濟の弛禁上奏と（したがって吳蘭修の「弭害」とも）似ている。銀の流出のために生じた銀貴錢賤が及ぼす影響を強調し（Ⅰ・Ⅱ）、従來の方法を吳蘭修の「弭害」よりも的確に分類しながらその無效性を説く（Ⅲ）。弛禁論については、國內産のアヘンで洋煙を押し返す部分だけを取り上げ、商人は效き目の鈍い内地アヘンに洋煙を混ぜて重利を圖ろうとするだろうと反駁している。いまひとつの柱、アヘン貿易を合法化する試みには觸れない。すべてを斥けた黃爵滋は問題を吸煙者だけに絞る。「それ耗銀の多きは販煙の盛んなるに由り、販煙の盛んなるは食煙の衆きに由る。吸食無ければ自ら興販無く、興販無ければ則ち外夷の煙自ら來たらず。今、罪名を加重せんと欲すれば必ず重く吸食を治めよ」。三年前（道光十五年九月初九日）の「敬陳六事疏」⁽⁷⁶⁾では躉船、快蟹、密口の調査・處罰を黃爵滋は請願していた。三年後、國內の吸煙者だけに眼を向け對外的な關心を示さないこの上奏は、唐突で場ちがいな感じがする。これはいくまで黃爵滋自身の問題として考えられなければならないだろう。だが不思議なことは、上奏の發表された當時の（黃爵滋・林則徐を含めた）人々も、現在の私たちもこのテキストを素直に讀んでいないように見えることである。アヘ

ンの弛禁に對して嚴禁を説いたこのテキストに黃爵滋・林則徐・魏源らのイメージを重ね、そのままイギリスに對する「抵抗」の文書とみなすこともある。だがこのテキストは吸烟者を極刑に處すること以外何も説いていない。

「弭害續議」に込められた溫訓の意圖は黃爵滋・林則徐に理解されなかった。そのことを傳える陳澧の一連の記述は生眞面目な彼の文章の中で際立って悲痛なものである。

私（陳澧）が敢えて經世濟民の説を述べ立てないのには譯がある。述べることができても權位が無ければ説を實行することができない。他人が私の言を取って實行し、もしあやまちがあつて（或有過差）、その結果天下を亂すようなことになれば、それは懼るべきことだ。溫訓についていえば、アヘンを禁ずるために論を著わし、黃爵滋が上奏し林則徐がこれを行つて遂に天下を亂した。深く戒めなければならぬ。⁽⁷⁷⁾

「天下を亂」すとはアヘン戦争を惹き起こしたことを指している。林則徐に「過差」があつたといっているわけだが、「祭溫伊初文」ではこのことばに具體的な内容が込められる。

在野の私論（溫訓の「弭害續議」）が朝廷に掲げられ、敕命を攜えた者（林則徐）がやってくるとは思つてもみなかった。しかし殘念なことに常理にはずれたやり方をしたために、官には誅せられず、夷との間に隙を生じた（惜哉奉行、乃倒而施、不誅於官、而覺於夷）。君（溫訓）は天を仰いで嘆息している。十中八、九は思う通りにならない（不如意事、十且八九）。これからは口を閉じて言わず、書物は無用のものしか書かない（自今出言、宜緘我口、自今著書、宜覆我瓴）。

いうまでもなく林則徐のもたらした「官に誅せられず、夷に覺あり」という結果を自分の意圖とは違つと溫訓は嘆いているのである。「官に誅せられず」とは吸烟者が官によつて誅せられることなく、の意味である。「官に誅せられること」即ち吸烟者を死刑に處することを「弭害續議」は主張していた。だがそれと同時に吸烟者だけに問題を絞ることによつて「夷に覺ある」ことを溫訓は避けようとしていたのではないか。「官に誅せられ、夷に覺あらず」が「弭害續議」の意圖したところではなかったのだろうか。魏源の『海國圖志』「議款篇」に對する批評の中で陳澧はあきらかに溫訓を念頭に⁽⁷⁸⁾

置きながら、この事情をさらに引き伸ばして語っている。

そもそも夷寇と烟患とは異なる二つのことだ。中國が吸烟してもそれはただ中國の財を耗るだけのことだ。(同様に)中國が禁烟してもそれはただ中國の人を罪するだけで夷寇を致すはずもない。林則徐がカントンに來た當初はアヘン問題を嚴重に處理し、内地の民だけでなく外夷も甚だ畏服していた。もしアヘンの強制提出、保證書の提出を強制せず……………ただはつきりと諸夷に諭し、アヘンを販する者と(それを吸う)内地の民人を一律に罪すれば、諸夷は林則徐の聲威に震え、たとい陽奉陰違してアヘンの販賣をやめようとはしないまでも決して犯順することはなかった。

アヘン問題をそれを持ち込む諸外國から切り離し中國自身の問題だとみなすこと、別のカントン人のことばを借りれば「治内」と「治外」を峻別すること、⁽⁷⁹⁾この考え方はそのまま溫訓の「弭害續議」に表現されている。「林則徐がカントンに來た當初はアヘン問題を嚴重に處理し……………」という一文は、カントンの紳士たちと共に内地の吸烟者に對する禁烟運動に林則徐が攜った事實を指している。道光十九年一月二十五日カントンに到着した林則徐は、二月初め「札各學教官嚴查生員有無吸烟造冊互保」「曉諭粵省士商軍民人等速戒鴉片告示稿」において内地禁煙の意圖を表明する。二月十八日にはカントンの紳士・商人たちと烟土烟槍を繳出させるために局を設けることを相談し、二十一日紳士たちは「收繳烟土烟槍總局」を大佛寺に増設する。⁽⁸⁰⁾内地の民人に對する禁烟運動に熱心であったカントンの紳士たちも、併行して林則徐が行っていた諸外國に對する繳烟、永遠にアヘンを持ち込まないという具結の要求には不安を感じていた。林則徐の最も親しい協力者であった梁廷枏もこれに對しては懷疑を示している。⁽⁸¹⁾

内地の吸烟者に對象を絞ることでアヘン問題に解決を與え、同時に「夷寇」の招來を避けることに「弭害續議」の目的があるとすれば、溫訓の考えは吳蘭修の「弭害」と底流で通じ合っている。「弭害」とそれに反駁するために書かれた「弭害續議」とは、アヘンの吸飲を容認するか、あるいは嚴禁するか、行商の事情を配慮しているか、という點では異なるが、一方が合法化することによってアヘン問題をカントン貿易の中に包み込み、他方がアヘン問題をカントン貿易から

切斷し、共に現状のカントンには手を觸れないように配慮されている點では一致している。溫訓の「弭害續議」も道光十四年頃の不安に感じられたカントンの中から生まれ、カントン人のかわらぬ感情を表現している。「收繳烟土烟槍總局」の設立に熱心であった張維屏が、同時に許乃濟の弛禁論を「富を民に藏するの一道」と稱讃し、さらにカントンに到着した林則徐が舊闊を絞するために訪問したとき「邊疆を開く勿かれ」と忠告せざるを得なかったことは問題の複雑さを象徴している。⁽⁸²⁾

冷静に読んでみれば諸外國に對する言及を避けている嚴禁上奏を黃爵滋・魏源・林則徐らがどのように見ていたかは慎重に考えなければならない問題である。だが溫訓の意圖は彼らに理解されなかった。北京の人々とカントンの知識人とはものの見え方がどうしようもなくズレてきている。危機意識の質も異なる。北京の人々は中國全體の視點から内政の問題のひとつとしてアヘンを考えている。アヘンの問題はどこまでもアヘンの問題として論理的に考えられている。すでに變化しつつある状況を敏感に感じとっていたカントンの人々にとって、アヘンは中國全體の問題であると同時にカントン自身の問題として、しかも事はアヘンに限られないカントンの存在そのものに關わる問題として感じられていた。世界史の波に最も早く洗われていたのはカントンの人々であつて北京の知識人たちではない。アヘン問題という視角から一連の經過を観察した魏源の『道光洋艘征撫記』は「公司」の「解散」に對して見當はずれの貧しい理解しか示していない。

おわりに

私には、西洋認識の先驅者林則徐・魏源という常識は幾分さしひいて考えなければならぬように思える。カントン時代の林則徐の最も親しい協力者は越華書院監院、學海堂學長梁廷枏であつた。『四洲志』の編纂は彼をはじめとするカントンの知識人の力にどれほど頼つたのか、その内容はすでに『廣東海防彙覽』『粵海關志』の經驗をもっていたカントンの人々にとって本當に新鮮なものであつたのか、また魏源の『海國圖志』と梁廷枏の『海國四說』は共に『四洲志』編纂

に際して収集された材料から生まれた、表現を異にする雙子なのか、あるいはそうではないのか、という問題は一度慎重に考えてみる必要がある。十九世紀のイギリスを歴史的にとらえようと試みる『海國四説』『蘭甯偶説』の記述は『海國圖志』よりも生彩がある。種痘、西洋人の病院（バーカーの博濟醫院）、中國の醫術と西洋の醫學とを融合する試み（陳定泰『醫談傳眞』⁽⁸³⁾）——身體に關わる最も切實で日常的な側面からすでに根つきつつあった「西學」を眼にカントンの知識人たちの経験は形づくられた。龔自珍・魏源あるいは林則徐・黃爵滋といった人々の社會的経験は『海』から生まれてきたものではない。北方情勢（龔自珍の「西域置行省議」）、鹽政・漕運など内政の問題に對する關心こそ彼らの存在を際立たせてきたものであり、アヘン問題もその延長線上にある。

さらに私には、「夷の長技を師とし以て夷を制す」と輕々と言つてのけることのできた魏源一人から清末思想史を語り始めることにはいくらか慎重にならねばならないように思える。もしつとめて素直にこのことばを敷衍していけば「長技」の中味が「西機」、「西學」から「西政」へと順調に深まっていくな思想史に思い至る。この一言には輕やかで樂觀的な響きがある。『海國四説』『合衆國說』の中で（魏源と同じように）アメリカ合衆國の民主政治を稱讚した梁廷枏は、しかし魏源のこのことばを認めることができない。⁽⁸⁴⁾西洋の文物、政治制度の有効性は認めざるを得ないが、それはそのまま受け入れることのできないものである。落差は埋められなければならない。すでに道光二十年代前半、學海堂の學長陳澧と鄒伯奇は西法が實は墨子に源をもっていることを「發見」する。⁽⁸⁵⁾この苦澁に満ちたレトリックは、あるときは西學の受容を正當化する方向に搖れ、また別のときには西學を斥けて中學の優位を主張し、中學に思いをひそめる方向に搖れながら、洋務運動時期のいくらかの人々の考えの複雑さ、齒切れの惡さの底流を形造っていく。

思想は社會的なコンテクストの中に返してはじめて生き生きとした姿をとりもどす。自らによってのみ支えられているように見える龔自珍・魏源らの思想も、同時代の他の様々な考え方の中に投げ入れ、互いに認めあいながらそれぞれを固有の與えられた條件の中で検討することが必要だと思える。

(1) 東塾集 卷二。

(2) 『張南山集』「藝談錄」卷上 魏源。

(3) これらの人々を一つの名目の下に括ってしまうことはおそらくできないだろう。その幾人かは宣南詩社に属していたが、程恩澤を中心としたグループといういい方もできるのである。楚金氏『道光學術』(原載『中和月刊』第二卷、『中國近三百年學術思想論集』一九七八に再録)。しかし彼らが北京を交流の場としていたことは間違いない(例えば『龔自珍全集』一九七五の「定盦先生年譜」を見よ)。學海堂の幾人かは彼らと北京で出会い、またそう意識していたため本稿では「北京の知識人」「北京の人々」という曖昧な表現をするが、本来、より綿密な検討を要する事柄である。

(4) 田中正美氏「アヘン戦争時期における抵抗派の成立過程」『東アジア近代史の研究』一九六七、同氏「危機意識・民族主義思想の展開」『講座中國近現代史』一 一九七八。

(5) 程含章 嶺南續集 觀風策問。

(6) 道光十年代のアヘン論議に関する論文は多いが、本論文のテーマに關してどうしても觸れておかねばならない業績がある。容肇祖氏「學海堂考」(『嶺南學報』第三卷第四期 一九三四)。學海堂の研究が少ないのは容氏の論文が最初にしてあまりにも完璧であるためではないだろうか。アヘン問題を念頭におきながら吳蘭修を中心にカントンからの視點を獲得しているものに井上裕正氏「吳蘭修とカントン社會」(谷川道雄氏編『中國士大夫階級と地域社會との關係についての總合

的研究』一九八三)がある。カントン社會の中で吳蘭修の占める位置、希古堂といった事柄はすでに井上氏が簡潔に述べられている。さらに「カントン貿易體制下においてカントン社會が強いられた變容過程」という魅力あるテーマが提示されている。カントンの弛禁論は獨占體制が危機に瀕していた行商の再建を意圖したものであること、ネピア事件によって暴露された中國側の防備の無力さがカントン當局を萎縮させ弛禁論に傾かせたこと、いずれにしてもイギリス東インド會社と自由貿易商人をめぐる事情が關つていることは、佐々木正哉氏がそれぞれ「イギリスと中國」(榎一雄氏編『西歐文明と東アジア』一九七一)、「近代中國における對外認識と立憲思想の展開」(『近代中國』第一六卷 一九八四)ですでに述べられたところである。拙稿第二章aは道光十四年に作製された吳蘭修の「弭害」にできるかぎり密着しながら、意識的にカントンの人々・カントン官僚の眼から當時の情況を見て二、三の事情を加えたものである。もちろん自由貿易商人をめぐる客觀的研究には、Greenberg, M. *British Trade and the Opening of China, 1800—42*. Cambridge, 1951. がある。

井上氏には多くの貴重な御教示をいただきました。ありがとうございました。

(7) 第一章の記述で特に注記を加えていないものは『學海堂志初編・續編・補編』(香港亞東學社 一九六四 以下、單に『學海堂志』と呼ぶ)を中心に『學海堂初集』、阮元『學經室集』、學海堂人士の文集(その多くは『學海堂叢刻』に收め

られている、地方志の各人の傳などの零細な史料に據ったが、その一々については煩瑣になるため省略に従う。

(8) 劉伯驥『廣東書院制度』一九五八 頁七。

(9) 學海堂の經費については『學海堂志』「文檄」及び「經費」に詳しい。

(10) (光緒) 廣州府志 卷六六 建置略三、(同治) 南海縣志 卷二 金石略二 疏濬西關濠水記、梁嘉彬『廣東十三行考』一九六〇 頁三二—二、(同治) 南海縣志 卷四 建置略一 學海堂。

(11) (光緒) 廣州府志 卷一六二 雜錄三。

(12) 吳蘭修 桐花閣詩鈔 擬廣東文苑傳。

(13) 東塾集 卷五 梁南溟傳。

(14) (光緒) 嘉應州志 卷二三 人物一。

(15) (同治) 南海縣志 卷一八 列傳。

(16) 例えば『學海堂初集』卷一六 桂弼 新建粵秀山學海堂記。

(17) (重修) 廣東通志 職名及び卷首。

(18) 阮元 寧經室三集 卷二 改建廣東鄉試闕舍碑記。(光緒) 廣州府志 卷六五 建置略二。

(19) 阮元 寧經室三集 卷五 新建南海縣桑園圍石工碑記。

(20) (同治) 南海縣志 卷一八 列傳 譚瑩。

(21) 孫毓陶『清代廣東詞林紀要』一九七〇 頁一七九、一八四—五。

(22) (光緒) 廣州府志 卷一六三 雜錄四。

(23) (同治) 南海縣志 卷四 建置略一。(同治) 番禺縣志

卷一五 建置略二。梁嘉彬『廣東十三行考』頁三三—三四。

(24) 例えば、冷竹洋に留まる蘆船について魏源が「而總督阮元密奏請暫事羈縻、徐圖驅逐、于是因循日甚」(道光洋艘征撫記 卷上)とするのに對し、梁廷相は「當阮元官總督時、知流毒日深、終必決裂、而內地商民資以求食、欲操其本而無從也、則密奏暫事羈縻、徐爲之計」(夷氛聞記 卷一)と考えていた。一八六三年の段階から回顧したものが、地方官に對するカントン人の「功科表」としてみるのに便利なものに譚宗俊「覽海賦」(阿英氏編『鴉片戰爭文學集』一九五七上冊 頁二五四—七七)がある。譚宗俊は譚瑩の子で光緒六年から學海堂の學長をつとめた。

(25) 吳蘭修 登雲山人文藁序『廣東文徵』所收。道光三年のことである。「登雲山人」とは溫訓を指す。

(26) 『襲自珍全集』頁六二九 吳石華手札。

(27) 桂文燦 經學博採錄 卷三及び卷四。阮元 寧經室續集 卷二 下 戶部右侍郎管錢法堂春海程公神道碑銘。

(28) (同治) 南海縣志 卷一八 列傳 譚瑩。

(29) (同治) 番禺縣志 卷五三 雜記一。

(30) 邵循正氏の校定した近代史料筆記叢刊本(一九五九)を使用した。ただし句讀は必ずしも従っていない。

(31) ただし全く同一というわけではない。許乃濟の上奏の論點の一つ、官員・士子・兵丁と民間人を區別し前者の吸烟は許さない、という考えは「弭害」にはない。

(32) 『海國四說』「蘭荷偶說」卷三。

(33) 粵海關志 卷二七 夷商二。

(34) 「蘭甯偶說」卷四で梁廷枏は、公司が解散した方が散商を管束しやすいという葉鍾進の考えを紹介している。

(35) 粵海關志 卷二七 夷商二。

(36) 同右。

(37) 廣東海防彙覽 卷三七 方略二六 馭夷二 道光十四年九月初十日盧坤片奏(盧坤C)

『廣東海防彙覽』には道光十四年六月以降の盧坤の上奏が六本収められている。左の如く略稱する。

卷三七 方略二六 馭夷二 十四年九月初十日會奏(盧坤A)

同日片奏 (盧坤B)

同日片奏 (盧坤C)

十五年正月會奏 (盧坤D)

十四年六月會奏 (盧坤E)

八月會奏 (盧坤F)

卷四二 事紀四

國朝二

(38) 粵海關志 卷二九 夷商四。

(39) 同右。

(40) 盧坤E。

(41) (同治) 南海縣志 卷二六 雜錄下。

(42) 井上裕正氏「清代嘉慶・道光期のアヘン問題について」

『東洋史研究』第四一卷第一號 一九八二、及び同氏註(6) 論文。

(43) 『張南山集』「藝談錄」卷上 龔肇祚。

(44) 張亨甫全集 卷三 上盧厚山宮保書、卷一八 浴日亭。

(45) 註(24)参照。

(46) 例えば梁廷枏 海國四說 總序に「故從來馭夷之方、惟事

羈縻、養欲給求、開誠相與、毋啓以隙而挑以衅、是即千古懷柔之善術」とある。

(47) 宣宗實錄 道光十四年五月丙戌。

(48) 盧坤A、盧坤B。

(49) 史料旬刊 第三期 道光十一年查禁鴉片煙案。

(50) 盧坤A。

(51) 盧坤B。

(52) 佐々木氏前掲『近代中國』論文 頁二三八—九。

(53) 史料旬刊 第九期 道光朝外洋通商案 李鴻賓片二。

(54) 佐々木氏『西歐文明と東アジア』論文 頁四三四以下。

(55) 粵海關志 卷一四 奏課一。

(56) 粵海關志 卷二五 行商。

(57) 粵海關志 卷二九 夷商四。

(58) 蔣廷黻氏『近代中國外交史資料輯要』一九三一 上卷 頁一四。

(59) 坂野正高氏『近代中國政治外交史』一九七三 頁一四四—五一。佐々木氏前掲『近代中國』論文 頁二二—二三。

(60) 史料旬刊 第二期 道光朝外洋通商案 盧坤等片、盧坤E。

(61) 盧坤E。

(62) 史料旬刊 第二五期 道光朝外洋通商案盧坤・祁項摺。

(63) 粵海關志 卷二九 夷商四。

(64) 丁寧「論梁廷枏」『齊魯學刊』一九八四—六。『廣東海防彙覽』は東洋文庫に所蔵されているものを使用した。

- (65) 『海國四說』「合省國說」序。
- (66) (同治) 南海縣志 卷二六 雜錄下。
- (67) 註(65)。
- (68) 「蘭甯偶說」卷三。
- (69) 「禁阿芙蓉議」附錄豫菴筆談一則。
- (70) 後述の陳榮氏「五華詩苑」跋。
- (71) 東塾集 卷六。
- (72) 陳澧「祭溫伊初文」。桂文燦 經學博採錄 卷四。註(25) 吳蘭修 登雲山人文彙序など。
- (73) 田中正美氏前掲「危機意識・民族主義思想の展開」頁七七—八。
- (74) 桂文燦 經學博採錄 卷四。
- (75) 『黃爵滋奏疏・許乃濟奏議合刊』(中國近代史資料叢書 一九五九)に收録されたものを使用した。
- (76) 同右 頁四三—九。
- (77) 『嶺南學報』第二卷第二期 一九三一 「陳蘭甫先生澧遺稿」
- (78) 東塾集 卷二。
- (79) 註(24) 譚宗俊 覽海賦。
- (80) 來新夏『林則徐年譜』 一九八一 頁二〇四—五。
- (81) 夷氛聞記 卷一 鄧廷楨に送った書信。
- (82) 『張南山集』「藝談錄」上 許乃濟。陳澧 東塾集 卷五 張南山先生墓碑銘。
- (83) 洗玉清『廣東文獻叢談』 一九六五。
- (84) 夷氛聞記 卷五 最後の「論曰」。
- (85) 例えば、東塾集 卷三 鄧特夫學計一得序。鄧伯奇は李善蘭と並び稱される科學者であり、『學計一得』には「論西法皆古所有」と名づけられた一篇が收められている。

THE CANTON XUEHAI-TANG 學海堂 AND THE DISCUSSIONS ON THE OPIUM LAWS

MURAO Susumu

The Xuehai-tang was an academy established in 1820 by Ruan Yuan in order to make Han learning 漢學 take root in Canton. The Xuehai-tang was a Cantonese academy and its members were the city's intellectuals. In the proposals for relaxing the laws against opium use (viz. Wu Lanxiu's 吳蘭修 tract "Preventing evils" 弭害) that are often discussed as a contrast to the proposals made by Beijing intellectuals for strictly forbidding the use of opium, can be seen the interests of the people of Canton at work, a Canton that was not already calm and quiet. Huang Juezi's 黃爵滋 1838 memorial proposing the strict prohibition of opium was said in Canton to have been based on a draft made by the Cantonese intellectual Wen Xun 溫訓 (the "Continuation of the proposals for preventing evils" 弭害續議). In what it proposed can be seen, on the one hand, a critique of Wu Lanxiu's arguments for relaxing the laws against opium use, and, on the other hand, an expression of the common interests of the Cantonese.